

「之子」考

——漢魏六朝期の詩を中心に——

矢田博士

要旨

「之子」という語は、『詩経』に由来する詩語である。それは、『指示詞（之）＋人称詞（子）』といった組み立てから成り、「この人」という意味を表す。『詩経』においては、この語によって表現される詩中の登場人物は、基本的に多種多様である。しかし、漢魏六朝期の詩における「之子」という語の用例を調べてみると、「去りゆく人」「去りゆきし人」を表現する場合に用例が集中する、といった現象が見られるのである。

ではなぜ、漢魏六朝期の詩では、「之子」という語に関してこうした現象が見られるのか。本稿では、その要因について、「之子」という語それ自身が備え持つ本質的な要因」と『漢魏六朝期という時代に関わる背景的な要因』といった観点から考察し

た。

〔キー・ワード〕

「之子」「詩経」「毛伝」「鄭箋」「漢魏六朝詩」「贈答詩」

〔目次〕

一 序

二 『詩経』における「之子」の例

三 漢魏六朝期の詩における「之子」の例

四 士人社会における「友情詩」尊重の傾向

五 漢字の多義性による派生的解釈の可能性

六 結語

一 序

桃之夭夭 桃の夭夭たる
 灼灼其華 灼灼たり 其の華
 之子于歸 この子 子に帰ぐ
 宜其室家 其の室家に宜しからん

『詩経』「周南・桃夭」の一節である。ここに使用されている「之子」という語は、『詩経』の中に頻出する詩語の一つである。この「之子」という語については、例えば、清・王先謙の『詩三家義集疏』巻一「桃夭」に引く「魯齊説」、および「爾雅」の「釋訓第三」に、「之子者、是子也。」とあり、また後漢・鄭玄の箋にも「之子、是子也。」とあるように、漢代においてすでに、「この人（這個人）」という意味の語、つまり「指示詞（之）＋人称詞（子）」といった組み立ての語として定義づけられている。よって、後世の詩人が「之子」という語を使用するに当たっては、当然、以上のような訓詁面での定義に従って使用していたものと考えられる。

「之子」という語がこのように「この人」という意味の語であるとすれば、この語によって表現される詩中の登場人物は多種多様であつてよいはずである。現に、『詩経』においては、「之子」という語で表現される人物は多種多様である。

しかし、漢魏六朝期の詩においては、「之子」という語の用い

られ方に、以下のような興味深い現象・特色が認められるのである。すなわち、

◇「離別」「送別」などを詠った詩とりわけ「贈答詩」の中で、「自分のもとから去りゆく人」あるいは「去りゆきし人」―すなわち「離別の対象」―を、「之子」という語で表現する例が極めて顕著に見いだせる。

といった現象・特色である。

ではなぜ漢魏六朝期の詩においては、「之子」という語について、以上のような用法上の特色が見られるのか。本稿では、その要因について考えてみたいと思う。

二 『詩経』における「之子」の例

まず初めに、『詩経』における「之子」の例を確認しておくことにする。『詩経』では、以下に挙げるように、全部で三百五篇あるうちの十九篇に「之子」という語が使用されている。

① 之子于歸、宜其室家。

【毛伝】 之子、嫁子也。

（『周南』桃夭）

② 之子于歸、言秣其馬。

【鄭箋】 之子、是子也。……於是子之嫁、我願秣其馬、致

禮餼、示有意焉。

③

之子于歸、百兩御之。

〔周南〕漢廣

【毛傳】百兩、百乘也。諸侯之子嫁於諸侯、送御皆百乘。

【鄭箋】之子、是子也。御、迎也。

〔召南〕鵲巢

④

之子歸、不我以。

【鄭箋】之子、是子也。是子、謂嫡也。婦人謂嫁曰歸。

〔召南〕江有汜

⑤

之子于歸、遠送于野。

【毛傳】之子、去者也。

【鄭箋】婦人之禮、送迎不出門。今我送是子、乃至子野

者、舒已憤、盡已情。

〔邶風〕燕燕

⑥

心之憂矣、之子無裳。

【毛傳】之子、無室家者。

【鄭箋】之子、是子也。時婦人喪其妃耦、寡而憂。是子無

裳。無爲作裳者、欲與爲室家。

〔衛風〕有狐

⑦

彼其之子、不與我戍申。

【鄭箋】之子、是子也。彼其是子、獨處鄉里、不與我來守

申。

〔王風〕揚之水

⑧

彼其之子、舍命不渝。

【鄭箋】之子、是子也。是子處命不變。

〔鄭風〕羔裘

⑨ 彼其之子、美無度。

【鄭箋】之子、是子也。是子之德美、無有度。

〔魏風〕汾沮洳

⑩ 彼其之子、碩大無朋。

【鄭箋】之子、是子也。謂桓叔也。

〔唐風〕椒聊

⑪ 彼其之子、三百赤芾

【鄭箋】之子、是子也。

〔曹風〕候人

⑫ 之子于歸、皇駁其馬。

【鄭箋】之子于歸、謂始嫁時也。

〔邶風〕東山

⑬ 我觀之子、籩豆有踐。

【鄭箋】之子、是子也。斥周公也。

〔邶風〕伐柯

⑭ 我觀之子、袞衣綉裳。

【毛傳】所以見周公也。

【鄭箋】王迎周公、當以上公之服往見之。

〔邶風〕九罭

⑮ 之子于苗、選徒囂囂。

【毛傳】之子、有司也。

⑩ 之子于征、劬勞于野。

〔小雅〕車攻

【毛伝】之子、侯伯卿士也。

〔小雅〕鴻鴈

⑪ 我觀之子、我心寫兮。

【鄭箋】之子、是子也。謂古之明王也。

〔小雅〕裳裳者華

⑫ 之子于狩、言輟其弓。

【鄭箋】之子、是子也。謂其君子也。

〔小雅〕采芣

⑬ 之子之遠、俾我獨兮。

【鄭箋】之子、斥幽王也。

〔小雅〕白華

〔参考〕

⑭ 乃如之人兮、逝不古處。

【鄭箋】之人、是人也。謂莊公也。

〔邶風〕日月

以上に挙げたのが、『詩経』における「之子」の例である。後漢の鄭玄の箋に繰り返し「之子、是子也。」とあるように、「之子」という語が「この人」という意味であるならば、それによって表現される詩中の登場人物は多種多様であってよいはずである。

その点について、『詩経』ではどうかといえば、「嫁ぎゆく花嫁」を表現している例が五篇（①②③④⑫）と、複数の例が見られるものもあるが、その他については、例えば「室家のない独身男性」（⑥）であったり、「申という国の守備に駆り出されることを免れ郷里にいる人」（⑦）であったり、あるいはまた「狩りをする役人」（⑮）であったり、「古の明王」（⑰）であったりと、「之子」という語によって表現されている人物は、基本的には多種多様であると言えよう。また、「之子」という語によって、「去りゆく人」「遠ざかる人」を表現する源泉的な例（⑤⑬⑱）が、『詩経』においてすでに見られるものの、その数は決して多いとは言えないであろう。

三 漢魏六朝期の詩における「之子」の例

ところが漢魏六朝期の詩では、前述したように、「之子」という語の用例が「自分のもとから去りゆく人」あるいは「去りゆきし人」——すなわち「離別の対象」——を表現する場合に集中する、といった現象・特色が見られるのである。

まずはその点を確認してみたい。

1 之子之遠、我勞如何。

（後漢・張衡「怨詩」）

2 之子在萬里、江湖迴且深、方舟安可極、離思故難任。

- 3 之子歸窮泉、重壤永幽隔。
(魏·曹植「雜詩七首·其一」)
- 4 之子于邁、介夫在戎。
(晉·潘岳「悼亡詩三首·其一」)
- 5 之子于遠、曷云歸哉。
(晉·陸機「贈武昌太守夏少明詩 六章·其四」)
- 6 之子既命、四牡項領、……嗟我懷人、其適惟永。
(晉·陸機「贈武昌太守夏少明詩 六章·其六」)
- 7 悠悠征人、四牡駢駢、……歲亦暮止、之子言歸。
(晉·陸雲「太尉王公以九錫命大將軍讓公將還京邑祖餞贈此詩 六章·其五」)
- 8 之子于行、民固謳歌。
(晉·陸雲「贈汲郡太守詩 八章·其四」)
- 9 之子之遠、悠悠我思。
(晉·陸雲「贈汲郡太守詩 八章·其八」)
- 10 之子于升、利見大人。
(晉·陸雲「贈顧驃騎詩二首 有皇八章·其七」)
- 11 百兩集止、之子于歸。
(晉·陸雲「贈顧驃騎詩二首 思文八章·其五」)
- 12 之子于邁、夙夜京畿。
(晉·陸雲「贈顧彥先 五章·其五」)
- 13 之子于升、亦躍于淵。
(晉·陸雲「贈顧彥先 五章·其五」)
- 14 晞聖而惟、亦顧之子、……會淺別速、哀以紹欣。……感彼遠曠、各此延娛。
(晉·陸雲「答大將軍祭酒顧令文詩 五章·其四」)
- 15 之子于潛、清輝遠振。
(晉·陸雲「贈鄭曼季四首 南衡五章·其一」)
- 16 之子于命、人應如頽、厚德時邁、協風允諧、惠此海湄、俾也可懷。
(晉·陸雲「答孫顯世詩 十章·其八」)
- 17 余執百兩轡、之子詠采繁。
(晉·嵇含「伉儷詩」)
- 18 之子于歸、言秣其馬、矧乃斯人、乃邁乃徂。
(晉·杜育「贈摯仲治詩」)
- 19 之子云往、我勞彌深。
(晉·摯虞「贈李叔龍以尚書郎遷建平太守詩 四章·其四」)
- 20 之子之往、四美不臻。
(晉·劉琨「答盧諶詩」)
- 21 疇昔之乖、永言莫見、之子于罹、再離淪煙。
(晉·郭璞「答王門子」)
- 22 晏安難常、理有會離、之子之性、惆悵低徊。
(晉·孫綽「與庾冰詩 十三章·其十」)
- 23 之子之遠、良話曷聞。
(東晉·陶淵明「答龐參軍詩 六章·其四」)

24 華宗誕吾秀、之子紹前胤。

25 聚散無期、乖舛易端、之子名揚、鄙夫忝官。
(宋・謝瞻「於安城答靈運詩 五章・其一」)

26 之子安所適、我方栖舊岑。
(宋・謝靈運「答中書詩 八章・其三」)

27 之子云邁、嗟我莫從。
(宋・鮑照「和傅大農與僚故別詩」)

28 悠然在天遇、之子去安極。
(齊・王儉「贈徐孝嗣詩」)

29 之子伏高臥、伊予空杼軸、無因渡淇水、見此猗猗竹。
(齊・劉繪「錢謝文学離夜詩」)

30 分手信云易、相思誠獨難、之子兩特達、伊余日盤桓。
(梁・吳均「贈周興嗣詩四首・其三」)

31 之子擅文華、縱橫富辭藻。
(梁・蕭琛「別蕭諮議前夜以醉乖例今晝由醒敬應教詩」)

32 故人獨之子、官聯更在茲。
(梁・王筠「寓直中庶坊贈蕭洗馬詩」)

(陳・江總「攝官梁小廟詩」)

以上に挙げたのが、漢魏六朝期の詩における「之子」という語の用例の全てである。これらの例を一覧しただけでも、次の点が確認できるであろう。即ち、「遠・邁・行・往・適・去・徂」など、「遠ざかる・進み行く」という意味の動詞が、動作主

である「之子」の述語として使用されている例が顕著に見いだせるといふ点である。また、漢魏六朝期の詩における「之子」の用例のほとんどが「贈答詩」の中での用例であることが、詩の題から確認できるであろう。

そこでさらに、これら三十二の「之子」の例について、それらがどのような人物を表現するために用いられているか、といった観点から分類してみると、次のようなはつきりとした結果が得られるのである。

イ 「離別の相手」を示す例：二十二例 (1 2 4 5 6 7 8 9 12 14 18 19 20 21 22 23 25 26 27 28 29 30)

ロ 「嫁ぐ花嫁」を示す例：二例 (11 17)

ハ その他：八例 (3 10 13 15 16 24 31 32)

「自分のもとから去りゆく人」あるいは「去りゆきし人」、すなわち「離別の対象」を表現する例が、三十二例中の二十二例と、実に全体の約七割を占めるのである。因みに、『詩経』においては五例と最も多く見られた「嫁ぐ花嫁」を表現する例は、漢魏六朝期の詩ではわずかに二例しか見られない。

このように、漢魏六朝期の詩における「之子」という語については、本稿の冒頭で指摘したような用法上の特徴、すなわち、◇ 「離別」「送別」などを詠った詩——とりわけ「贈答詩」——

の中で、「自分のもとから去りゆく人」あるいは「去りゆき

し人——すなわち「離別の対象」——を、「之子」という語で表現する例が極めて顕著に見いだせる。

といった点がはつきりと確認されるのである。

因みに、「之子」と同様、「指示詞十人称詞」といった組み立てから成るその他の詩語（例えば、「是人」「此人」「此士」「斯人」「其人」「夫君」「夫子」「伊人」など）について、漢魏六朝期の詩における用例を調べてみたところ、「之子」のような用法面での偏り、すなわち、ある特定の人物像を表現する場合に用例が集中する、といった現象はみられない。

漢魏六朝期の詩における「之子」という語の以上のような用法面での現象（偏り）は、単に偶然の結果なのであろうか。いや、そこにはやはりそのような現象を生じるに至らしめた何らかの必然的な要因があったと考えるべきであらう。少なくともそうした観点からの考察は不可欠であると思われる。そこで次節以降では、その要因について考えてみたい。

四 士人社会における「友情詩」尊重の傾向

漢魏六朝期において、「之子」という語が「離別の対象」を表現する場合に集中的に使用されるようになった要因として、まずは次のようなことが考えられるであろう。すなわち、

◇ 詩作という行為が、漢代以降、士人（知識人）たちの間での知的かつ社交的な行為とみなされるようになり、男女

間の愛情といった、より個人的要素を含んだ「恋愛の詩」よりも、むしろ士人社会において、士人同士の相互の信頼を高め合う、より社会的要素を含んだ「友情の詩」——とりわけ、別れゆく友に対して変わらぬ友情を誓い合う、「離別」「送別」をテーマとした「贈答詩」——が、好んで作られるようになった。

ということ。つまり、漢代以降、士人社会において「友情の詩」を尊重する傾向が高まったことにより、「之子」という語によって「離別の対象」が表現される割合もまた、それに伴って高まった、と考えられるのである⁽²⁾。

しかも、「之子」という語は、儒教の經典の一つである「詩経」に由来する語であることから、士人たちの間では、典雅な趣を備えた語として認識されていたことであらう。だとすれば、詩を贈る相手をその詩の中で表現する場合、「之子」という語は、それ自身が備え持つ典雅な趣により、相手に対して敬意を表すことができ、互いの友情をさらに高め合えるといった効果が期待できるゆえに、極めて相応しい語であったと言える。

五 漢字の多義性による派生的解釈の可能性

漢魏六朝期の詩において、「之子」という語が「離別の相手」を表現する場合に集中的に使用されるようになった要因について、前節では、漢代以降の士人社会における「友情詩」尊重の

傾向といった観点から考えてみた。しかし、これはあくまで背景的な要因にすぎず、本質的な要因は、やはり「之子」という語それ自体の中に求められるのではないか。そしてそれを求める手がかりは、「之」という漢字の字義にあるのではないかと考える。

「之子」という語に見える「之」という漢字の意味については、例えば、後漢の鄭玄が『詩経』の中で繰り返し「之子、是子也。」と箋注を施しているように、漢代においてすでに「是」と同義、すなわち「この」という意味の指示詞であるとの訓詁面での定義づけがなされていた。よって、漢魏六朝期の詩人たちが「之子」という語を使用するにあたっては、当然こうした訓詁に依拠してそれを使用したはずであり、事実またそうであった。

しかし一方で、「之」という漢字には、例えば、『爾雅』卷上「釋詁第一」に、「如適之嫁徂逝往也。」とあるように、「ゆく」という意味があり、藤堂明保氏や白川静氏によれば、「足の進みゆくさま」が「之」という漢字の字源・初義であるという。

《藤堂説》

「解字」足の先が線から出て進みいくさまを描いた象形文字で、進みいく足の動作を意味する。……「これ」ということばに当てたのは音を利用した当て字。

……

《白川説》

象形 趾^{あし}あとの形で、歩（歩）の上半分にあたる。足の前に進むことを示し、之^し往^{かう}が字の初義。……これを指示詞「これ」に用いるのは仮借であるが、……

（「字統」平凡社）

「足の進みいくさま」が「之」という漢字の字源・初義であるか否かはともかく、少なくとも「進み行く」という意味が「之」という漢字の代表的な字義の一つであることは確かな事実である。つまり、「之」という漢字には、「ゆく」という意味が本来的に情報としてその中に組み込まれているわけである。だとすれば、かりにそれが別の意味で使われていたとしても、「之」という漢字から「ゆく」という意味を情報の一つとして読み取れることは、十分に可能なはずである。

「之」という漢字についての以上の点を踏まえるならば、「之子」という語についても、同様に「この人」という訓詁的な基本義に加えて、さらにそこから「ゆく人」という派生的意味をも読み取ることができるわけである。だとすれば、「之子」という語こそは、まさに「ゆく人」という派生的な意味をも読み取ること―逆にいえば、表すこと―が可能であるがゆえに、「自分のもとから去りゆく人」あるいは「去りゆきし人」の姿を詩的イメージとして表現するには、極めて相応しい語であると考えられるのである。

漢魏六朝期は、詩歌史において、何を表現するかといった内容面はもちろんのこと、如何に表現するかといった修辭面に對しても、詩人たちの関心が寄せられるようになった時期である。おそらく漢魏六朝期の詩人たちもまた、こうした漢字の表意性または多義性といった特質に着目し、「之子」という語に對して、「この人」という訓詁的な基本義のうえに、さらに「ゆく人」という派生的な意味を重ね合わせ、「自分のもとから去りゆく人」あるいは「去りゆきし人」、すなわち「離別の対象」を詩の中で表現するにあたり、この語を意識的に選択し使用していたのではないだろうか。

六 結 語

以上、漢魏六朝期において、「之子」という語が「離別」「送別」を詠った詩——とりわけ「贈答詩」——の中で、「自分のもとから去りゆく人」または「去りゆきし人」——すなわち「離別の対象」——を表現する場合に、集中的に用いられるようになった要因について考察した。以下それを、「之子」という語それ自体が備え持つ本質的な要因」と「漢魏六朝期という時代に関わる背景的な要因」とに分けて整理することで結語としたい。

【「之子」という語それ自体が備え持つ本質的な要因】

① 「之子」という語は、儒教の經典の一つである『詩経』に

由来する、いわば典雅な趣を備えた語であった。よって、詩を贈る相手をその詩の中で表現するにあたっては、「之子」という語は、相手への敬意を表すことができ、互いの友情を深め合えるといった効果が期待できるゆえに、極めて相応しい語であった、と考えられること。

② さらに、漢字の表意性または多義性といった特質に着目した場合、「之子」という語からは、基本義である「この人」という意味に加えて、さらに「ゆく人」といった派生的な意味をもそこから読み取ることができる。よって、「去りゆく人」の姿を詩的イメージとして表現するには、それは極めて相応しい語であるとともに、「この人」と「ゆく人」といった二つの意味が同時に表現できるといった点で、修辭的效果をも期待できる語である、と考えられること。

【漢魏六朝期という時代に関わる背景的な要因】

③ 詩作という行為が、漢代以降、士人たちの間での知的かつ社交的な行為となり、士人社会において士人同士の相互の信頼を高め合う、より社会的要素を含んだ「友情の詩」——とりわけ別れゆく友に對して変わらぬ友情を誓い合う「離別」「送別」をテーマとした「贈答詩」——が、好んで作られるようになったこと。

④ 漢代から六朝期にかけては、如何に表現するかといった修辭面に對する詩人たちの関心が高まりを見せた時期であったこと。

漢魏六朝期の詩人たちは、別れゆく友に詩を贈るにあたり、去りゆく友に対する敬意と去りゆく友の姿とを「之子」という語に託して表現していたのだと考えられるのである。

〔注〕

(1) 呉均の「贈周興嗣詩四首」の其二に「千里無關梁、安得王喬履」とあり、其三に「無因渡淇水、見此猗猗竹」とあることから、呉均が周興嗣にこの詩を贈った時点では、両者は離ればなれの位置関係にあることが分かる。そしてそれは、周興嗣が呉均と再会した折りに呉均の詩に答えた「答呉均詩三首」の其三に「昔別襄城村、同會長安市、誰學萊蕪飯、本得王喬履」とあることから、襄城村での離別によるものであることが分かる。

(2) 中国の古典詩においては、「友情詩」については一人称的な視点から描かれた作品が多いが、逆に「恋愛詩」については一人称的な視点から描かれた作品は少ない。「恋愛詩」については、男性の詩人が女性の視点から、つまり作者自身からは三人称的な視点に立って、客観的に描かれるのが一般的であった。その原因については、『中国詩歌原論』（松浦友久著、大修館書店、一九八六年、七十二頁）所収論文「唐詩に表れた女性像と女性観——「閨怨詩」の意味するもの」の（四）「いわゆる「恋愛詩」の乏しさと「友情詩」の多さについて」の中で系統的に論じられているので、参考にされたい。

(3) 例えば、梁の呉均の「贈周興嗣四首・其三」（第三節）の中で使用されている「之子」という語が、同じく「指示詞＋人称詞」といった組み立てから成る「伊予」という語、すなわち「伊（この）＋予（わたし）」という語と対句仕立てになっていることから、その点は確認で

きよう。

(4) この点に関しては、『詩の芸術性とはなにか』（袁行霈著、佐竹保子訳、汲古書院汲古選書7、一九九三年）所収論文「中国古典詩歌の多義性」の中に、以下のような指摘があり、大いに参考になるであろう。

詩人は語の本来の意味を用いるばかりではない。語を巧みに駆使して「意象」や「意境」を創り出す。それらは読み手の脳裏にさまざまな創造や連想を呼び起こし、感情を激しく波打たせる。時には語の意味を部分的に強めたり改めたりすることもある。詩人はこうして、公認され確定された意味しか無かった語を、複雑な味わいと主観の彩りで染め上げる。（四頁）

詩歌ではいつも言葉に能う限り多くの意味をもたせて、豊かな連想を広がらせる。中国古典詩歌の深い味わいは、こうした意味の重なり合いに拠っている。（五頁）

〔附記〕

本稿は、一九九四年十月九日（日）、日本中国学会第四十六回大会（於お茶の水女子大学）文学・語学部会において行った口頭発表「詩語としての「之子」のイメージ——離れゆく者・離れゆきし者への思い——」の内容を、補筆改訂したものである。当日、司会をしてくださった森野繁夫先生に厚くお礼を申し上げます。